

献血ルームの 夏目さん



cinnamonwan

「相良さん、いつもありがとうございます！」

いつもの献血ルーム。

明るく弾んだ声で応対してくれる、癒し系の夏目さんに献血カードを渡す。暗証番号と現在の体重をテンキーで入力してしばし待つ。

今日で献血するのは11回目になる。前回10回記念のガラスの器？おちょこ？みたいなのを貰った。粗品が欲しくて来ているわけではないけど、なんとなく達成感のようなものがあって嬉しい。

僕が献血する理由は、見知らぬ誰かを助けたいとか聖人のような理由ではない。夏目さんに会いたいという不純な理由だ。あの癒しオーラと、大きく透き通った瞳には人を惑わす魔力があると思う。背が小さく決して太っているわけではないけれど、癒しオーラと相まって丸いイメージ。髪は前髪を2本のピンで留め、後ろをゴムでポニーテールにしている。そしてなにより特筆すべきは胸部のボリューム。やや童顔な顔立ちでありながら、中高男子生徒を殺しかねないほどのサイズを誇る。ナース服左胸ポケットの2本のボールペンが苦しげな表情を浮かべているようだ。僕はボールペンになりたい！

まあ、不純な動機とはいえ、誰かの役に立ってるならいいじゃんってことで。

「それじゃあ、タッチペンで質問事項に答えていってくださいね☆」

星マークつきの笑顔で応対してくれる夏目さん、笑ったときに見える八重歯も魅力的です☆ 質問事項は海外渡航歴や健康状態等に関する質問。けっこう多いけどいつも通りなので簡単な作業。

次に問診・血圧測定。夏目さんの笑顔により血圧上昇が心配されたものの問題なく正常値だった。

そして血液検査。本番前にいつも血を抜いている腕とは逆の腕から少量血液をとり、検査。僕はいつも右から抜いてもらうので左からとる。注射はあまり得意ではないので針は見れない。

「チクッとしますよ」

と、これは夏目さんじゃない、スレンダー美人の高橋さんだ。切れ長のクールな瞳をしていて凜としている。罵倒して踏みつけてほしい。

さて、ここからが本番。献血の方法は主に2つ。全血献血400ml or 200ml（普通の献血）と、成分献血（血の中の一部成分のみを献血）に分けられる。全血は年に3回しかできないけど、成分は体に負担が少ないため2週間ごとに献血することができる。つまり、夏目さんに会いたい僕が選択すべきは成分献血なのだ。

しかし、前回の献血終了時に、ソファでフリードリンクを飲んでくつろいでいたところ、夏目さんに声をかけられた！

もう一度言う。

夏目さんに声をかけられたのだ！

献血中に夏目さんがお話してくれることはたまにあるのだが、終わってからは初めてだった。ちなみに僕から話しかける度胸はない。神々しくてお近づきになれない。ファンはアイドルとの距離感を大切にすることだ。決して近づきすぎてはならない。手を伸ばしすぎると、太陽に焼かれて墜落してしまう。

以下前回の回想。

「相良さん、ちょっといいですか？」

「えっ、あっ、ふあい！」

なんだか、やけに距離が近い。少し小声で話す夏目さん。

「次回はできれば全血献血400mlでお願いしたいんですけど。。。」

「はっ、はい、ぜんぜんかまらないんですけど、、、？」

「ありがとうございます。それでですね、、、」

ここでさらに僕に近づく夏目さん、耳元付近まできて囁くように、

「えっと、ちょっと、特別な献血になる・・・んですが」

「とととととと、とくべつというのはわわ？」

なんだか言いにくそうな夏目さん。

てか、ちかいちかい！吐息がかかりそうで、あっ、もう僕、死ぬ。

「ここでは、ちょっと言いにくくて、その次回来られた際にお話するということでダメですか？

あの、その、そのとき相良さんが嫌でしたら断ってもらっても。。。」

少し言葉遣いが崩れて、なぜか恥じらいの表情を見せるもとい魅せる夏目さん。

「ふあい！よろしくお願いします！」

もう、さっき死んだ命だ。このあとどうなっても構わない。自分の血を刀に吸わせて異形なものと戦ったり、献血賭けマージャンだったとしてもOKです！

「いえ、こちらこそよろしくお願いします（はあと）」

深々と頭を下げる天使。

それなら僕は鉄板土下座おも辞さない。

というわけで今日の献血は天使の勅命を受けての全血献血400mlだ。

今のところ夏目さんの様子が変わったところは見られない。いつも通り後ろで結わえたポニーテールをふりふりしながら笑顔で癒しオーラ粒子を高濃度で散布している。大抵のビーム兵器が無効化されるだろう。

最初に挨拶してくれた時、僕を見た瞬間、瞳が少し大きくなり輝いたように感じたけど気のせいかな？

「それでは、こちらによろしく願います（はあと）」

深々と頭を下げる天使リターンズ。

ここか？ここからなのか？

少し緊張しながら献血ルームに入る。

いつも献血しているリクライニングベットの間を抜けて扉の前に案内された。

「今回はこちらの部屋で願います。」

促され、部屋に入ると外にあったリクライニングベットがひとつと、脇に消毒液等の備品が入った棚。それだけの部屋だった。

カチャ

音に振り返ると後ろ手で扉を閉める夏目さんが屈託のない笑顔を向けてくれていた。今、鍵がかかる音がしたような。。。

「それじゃ、ベットに座ってもらえるかな？」

そう言いながら、ナース服の右肩のボタンをひとつはずす天使。

「ごめんね、ちょっとこの服胸元がきつくて。普段は怒られるから無理してるんだけど、ここでだけ、はずさせてね。」

お願いというポーズはより胸を強調するのです。眼福。

ベットに座り、リクライニングに背を預けると違和感を感じた。いつもなら左右に血液を採取するための機械が並んでいて、コードやらなにやら出てるはずが、なにもない。ベットの他に部屋に存在するのは備品棚と、地上に舞い降りた天使だけ。これでどうやって献血するのか。

「それじゃあ、私、ここでカミングアウトしちゃいます♪」

小さく手を挙げるしぐさがなんともかわいい。

いたずらっぽい笑みを浮かべながら近づいてきて、耳元で囁くように言った。

「実は私、吸血鬼なんです。」

...

.....

.....はい？

急すぎて事態についていけない。

彼女はなんだか「キャー言っちゃったあ」とでもいうように頬を染めてもじもじしている。かわいい。かわいいけどちょっとまって。

だが、ぼくの混乱と心の中での制止は届かず彼女はさらに言葉を紡ぐ。

「だから、あなたの血を吸わせてください。お願い（はあと）」

お願いというポーズはより胸を強調...じゃなくて、ええとどうしよう。これは予想外、想定外の範

困外。

「ダメ？」

ちょっと涙目、上目づかいの流し目と、あーいちいちかわいいなあこのやろー。

「私、相良くんじゃなきゃダメなの。」

かわいさの波状攻撃に僕は一切の思考を許されない。

うるうるした瞳に見つめられ、僕は首を縦に振らざるをえなかった。

約50年ほど前、日本政府は吸血鬼特務機関V I Pを設立した。

これによって世界経済は大きく風向きを変えた。吸血鬼の存在はこれまで秘匿されていて、人間で存在を知るものは各国の政府上層部の中でも限られたものだけだった。

それを公に発表し、さらに政府直轄の機関を組織したのだ。経緯についてはさだかではないが、当時の吸血鬼側からの圧力があったのではと噂されている。

日本政府の発表を皮切りに次々と世界各国が似たような組織を設立していき、世界的に吸血鬼の存在を知らしめることとなった。

日本におけるV I Pの役割は吸血鬼の力を必要とするところへ、適切な吸血鬼を派遣し人間社会と吸血鬼との共存を図ることを目的としている。日本政府の公式発表によると日本の吸血鬼は日本人口の1%に満たないと言われているものの、一人一人が一般の人間に比べ多くの面で秀でていることが多い。現に日本政府の3分の1が吸血鬼という現状だ。

僕もある程度の知識は小中学校の授業で習っていたし、僕の通っていた中学には男子の吸血鬼が同じ学年にいた。クラスが違ったので話したことはないが、かなりのイケメンで下校時に女子の人だかりを見つけるといつもその中心は彼だったのを覚えている。ちなみに吸血鬼は人間の血を必要とするが、年間で10ml~50ml程度の摂取で十分らしい。また、詳しくは知らないがブロック状のお菓子のような食品で代用することができるらしく、V I Pでは日本在住の吸血鬼に無償提供しているようだ。そして相手の同意があれば人間から血を吸うことも法律上問題ない。ただし、吸血鬼にとって人間から血を吸うことは、人間でいうところのキスに近い意味があるらしく、特別な関係でないと血を吸うことはないらしい。

ということは、僕は夏目さんにとって特別な存在！と勘違いしかけたものの、即、天使から訂正が入った。彼女はV I Pより派遣された吸血鬼で普段は人間として、ここの献血ルームで働いている。吸血鬼は社会的に認められているものの、まだ世間的には浸透しきっていないとは言えない。僕ら世代であれば小さな頃から吸血鬼についての教育を義務教育で受けているし、偏見も少ないのだが、年配の方にはフィクションとしての吸血鬼のイメージがまだ強くあるらしく、怖がったり、中にはあからさまに避けるような人もいるようだ。献血ルームと一緒に働く人間は知っているものの、普通に仕事をする上で吸血鬼の肩書きがやや問題になるケースもあるため隠しているという。そしてV I Pから派遣されたのは普通にナースするためではない。ある研究に協力するためである。吸血鬼の体には人間から吸った血液を一時的に蓄える器官が存在し、そこで蓄えた血液を1ヶ月ほどかけて体内で精製してから栄養として取り込むらしい。最近の研究ではその精製された血液を瀕死の人間に輸血すると、一命を取り留める可能性が向上するという説があり、現代医療では完治不可能とされている病気が治ったという例もあるという。そして、吸った血液は女性の吸血鬼の方が蓄える量が多く、その中でも夏目さんが特に優れていたということで派遣されてきたという。なぜかこの説明をするとき、夏目さんは顔を真っ赤にして俯いていた。とりあえずかわいいのでよし！

また、吸血鬼と人間にも相性があるらしく、吸血鬼一人一人に適合した人間の血液があって、適

合率が高ければ高いほどより良い血液が精製される。そして夏目さんに適した血液を有するのがこの僕だったというわけだ。完全適合者が見つかる可能性は1万人に一人と言われていて、滅多にあることではない。

夏目さんは僕への説明をすべて終わると改めて確認してきた。

「だから、あなたの血を吸わせてください。」

ちょっと勘違いしていたけど、違う意味で夏目さんにとって僕は特別な存在のようだった。説明する一言一言に夏目さんの真剣な気持ちが伝わってきた。断る理由はない。僕はもう一度大きく頷いた。

そもそも僕ら世代では吸血鬼はアイドルのような存在だ。実際、テレビでもアイドル吸血鬼タレントは若い世代に大人気で、揃いもそろって超絶美形ばかり。中学の同級生もイケメンだったし、夏目さんもかわいってことは、吸血鬼はみんな美形なんだろうか。

「それじゃあ、ベット平らにするから、上体起こして座って。」

夏目さんはどうやら少しリラックスしたようだった。言葉にいつものやわらかさ、丸みが戻ってきていた。

横のスイッチを押すと、ベットは自動で平らになった。僕は上体を起こし、足は投げだした状態。夏目さんは僕の後ろ側で正座するように座った。ここでさっきまで説明を理解するために費やしていた脳の機能が正常になり、冷静に状況を分析した途端、心臓が早鐘を打ち始める。

これはつまりこれからそういうことか。つまりこれからこれはそういうあれか。

「緊張しないで、大丈夫。私に身を委ねて。痛みはいつもの献血とほとんど変わらないはずだから。」

後ろから夏目さんの白くて細い腕が回される。

「私が支えてるから、背中後ろに預けていいよ。力抜いてね。」

耳元で吐息がかかる。ささやくように彼女は言った。

「それじゃあ、いくよ。チクチクッとしますよ〜。」

左の首筋に2本の歯が刺さった。

最初、チクチクツとした。けど彼女の言った通り、献血と同じでほとんど痛みはなかった。しかし、ここからが違った。

最初、体がふわっと浮いたのかと思った。春の良く晴れた河川敷の芝生で寝そべっているようなさわやかな感覚。心地よいひだまりに照らされているような感覚が僕の心をゆっくりと満たしていった。その後ふいに、背中をゾクゾクと快感が走り抜ける。表現しようがない今まで感じたことのないような快感が体を駆け抜ける。それが終わるとまた海の上でゆらゆらと漂うようなリラックスした気持ちになる。

それから夏目さんが僕の肩から口を離すまで、時間はわからないけれど体内時計で2〜3分置きになんともいえない快感が体を走り抜けた。背中から伝わる体温は時間を経るごとに熱を増し、夏目さんの慈愛に満ちた心を感じた気がして、なぜか涙が溢れた。

どれくらいの時間が経っただろう。

気がつくともベットのリクライニングが上がっていて、背もたれに体を預けて惚けていた。

隣に目を向けると素敵な微笑みを浮かべる夏目さん。額にじんわりと汗をにじませ、息があがっている。ナース服も体にはりつくように汗だくだった。

「お・・・おつかれさます。...これで今日の献血は終了です。受付で高橋さんから献血カードを受け取って、フリードリンクで水分をお採りいただいて、しっかり休憩してからお帰りください。本日はご協力ありがとうございましたっ！」

言い切った瞬間、足から崩れ落ちそうになったところを僕がとっさに支えた。

「だっ、大丈夫ですか！？人呼びましょうか？」

「すみません、一度にこんなに血を吸ったの初めてで、、、大丈夫。やりきったと思ったら気が抜けちゃって、少しの間このままでいてもいいですか？」

僕に体を預けたまま、彼女はぽつぽつと独り言のように話始めた。

「私、VIPでは落ちこぼれだったんですよ。何をやっても中途半端で他の仲間はみんな、もっと私なんかより能力もあって、同期はどんどん派遣先で成果を上げてて、私だけ本部で事務をしながら後輩と一緒に研修ばかり受けてて。上司にも胸がでかいのだけはとりえだなとかセクハラされて。だからやっとこの仕事が決まったときは嬉しかったの。私もがんばって人間と吸血鬼の橋渡しをするんだって。」

嗚咽を堪えながら話す彼女の感情がとめどなく溢れてくる。

「けどね、いざ現場に出てみると吸血鬼を怖がる人もまだまだいっぱいいて、外では吸血鬼であることを隠してろって本部からも言われて。ここの仕事は楽しいよ。吸血鬼とわかってても職場のみんなは優しくて、でも私と適合する血を持った人はずっと現れなかった。これじゃ私、VIPの一員として全然役に立てない。私がいる意味あるのかなってナーバスになってたの。そんなときにあなたが来てくれた。初めてきたとき、あなたはまだ高校生で友達に連れられてびくびくしてたよね。」

当時のことを思い出す。僕は友人の変なテンションに連れられてイヤイヤ付き合ったのを覚えている。そして夏目さんの笑顔に心奪われた。

「私、その時あなたをひと目見て感覚的にわかったの。きっとこの人が私の適合者だって。血液検査をしてみてやっぱりそうだとわかったときは嬉しかった。けどそれと同時に不安だった。適合者とわかってても入念な検査が必要で献血回数10回を越えないとダメで、やっと見つかったあなたが適格条件が揃うまで献血に来てくれるだろうか？もし来てくれたとしても吸血鬼に血を吸われるなんて嫌がられて当然だから、拒否されたらどうしようって。でもあなたは来てくれた。あなたは頷いてくれた・・・」

そこから先ははっきりと聞き取れなかった。でも子供のようにしゃくりあげながら、涙を拭いながら言葉を紡ぐその姿に、気持ちだけは伝わった気がした。僕はうん、うん、と頷きながら、彼女が泣き止むまでの少しの間、彼女を支えていた。僕なんかが知らない間に夏目さんの支えになれていたなんて。彼女の笑顔に救われていたのは僕の方だったのに。

彼女はひとしきり言葉を紡ぎ終わると気分が晴れたようだった。きっとずっと誰にも言えずに溜め込んでいたんだろう。

「...ありがと、もう大丈夫。よし！」

つらかった過去を振り切るように、勢いよく立ち上がる夏目さん、そのときだった。

僕の顔の横をいくつか小さなものが飛んでいった。

瞬間、僕の頭の中で一本の線につながった。

——ごめんね。この服ちょっと胸元きつくて

——吸血鬼の体には人間から吸った血液を一時的に蓄える器官が存在し

——吸った血液は女性の吸血鬼の方が蓄える量が多く、その中でも夏目さんが特に優れていた

——背中から伝わる体温は時間を経るごとに熱を増し

——上司にも胸がでかいのだけはとりえだとかセクハラされて

.....

.....

.....

...

僕の目は左右を飛んでいく数個のボタンを目の端に流しつつ、眼前に現れるであろう2つのエベレストを捉えるべく心のデジカメを構えた。

連写モードにスタンバイ。

今の僕なら卵が割れる瞬間を数フレーム単位で撮影し保存することが可能。

彼女はあきらかに反応が遅れている。

ナース服の胸元、ボタンでとめてあった右肩部分の上からきれいにめくれていく。初めて重力に感謝した。

胸の上部分があらわになったあたりで夏目さんの大きな瞳がさらに大きく見開かれる。気づいた。けれどももう遅い。人間の反応スピードには限界がある。その状態から手を動かし、体を屈めて胸を隠す、その前に確実に世界最高峰の夢を捧げる瞬間が必ずくる。それを捉えられない僕ではない。

ってあれ？

僕の心のカメラに天井が映し出される。

なぜ僕は上を見上げている？

何をしているぼくの煩惱！

早く前を向くんだ！

僕の心の叫びにもかかわらず、僕の体は一向に言うことを聞かない。

連写モードのカメラは、天井に引き続き、備品棚、ベット、扉と順番に映していく。

エベレストはどこだ！

天井、備品棚、ベット、扉、天井、備品棚、ベット、扉。。。

体の動きは強制的に一定方向の抗えない強烈なエネルギーに対して、どうすることもできないでいる。宙に浮いて回転してる？

天井、備品棚、ベット、扉、天井、備品棚、ベット、扉。。。

ベットを捉えるたびに徐々に大きくなっていく。

しかも運の悪いことにちょうど手すりの金属部分に近づいていく。金属部分の照り返しに僕の顔が映った気がした。

ってまずい。直撃コース！

天井、備品棚、ベット、扉、天井、備品棚、ベット、白い布、いいにおい、っん？

僕はいつのまにか夏目さんにお姫様抱っこされていた。

あれっ、ぼくの世界最高峰は？

眼前に迫るエベレストは、しっかりとナース服で覆われていた。

目の端で肩口を確認すると、さきほどまで彼女の前髪をおさえていた髪留めと、胸ポケットにさしていたボールペン2本がボタン穴をしっかりと捉え、ポニーテールをつくっていたゴムでしっかりと補強されていた。

...痛っ！

急に左頬がじんじん痛みだした。

「ごめんね、とっさのことで戸惑っちゃって。」

どうやら、僕は夏目さんの平手を喰らい、空中に投げ出され、その間にナース服を応急処置した上で、僕が落ちる前に抱きとめたということか。とんでもねえ。

「...痛っ！遅れてきた衝撃がとんでもなく痛い！」

そこに追い討ちをかけるように左頬に柔らかな感触。チュッ！

えっと、えっと、えと。。。

「いたいのいたいのとんでけ一☆のお・ま・じ・な・い♪」

「治ったああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

頬をさする僕を見て、いつものようにコロコロと笑う夏目さん。

もう吹っ切れたみたいだ。

献血カードを受け取り、ゆっくりとしていたら高橋さんがやってきた。夏目さんと同じナース服なのに、高橋さんが着るとファッション誌のモデルのように決まって見えるのが不思議だ。小声で聞いてくる。

「彼女、どうだった？」

「どうと言われても。。。」

さっきの部屋は機密保持のため防音処理がされていて、ちょっとしたことでは音は漏れたりしないはず。けど特別な献血をしてることは、ここの同僚だから知っているはず。

「ひゃうっ」

いきなり高橋さんは僕のシャツの襟首をひっぱる。もう強引なんだから。女の子みたいな声出ちゃったよ。

「うん、大丈夫そうね。彼女、今回が初めてだったから、うまくやれてるか心配だったのよ。」高橋さんはそれだけ言うと、さっさと受付へ戻っていった。クールビューティ。

僕の肩には特にガーゼなどは張られていない。吸血鬼の歯は吸い終わったあと傷口に特殊な液を分泌し、局所的に回復を加速させるらしい。したがってほんの数分しか経ってないのに僕の肩の傷はほとんど残っていない。ちなみに夏目さんは今、さっきの部屋で休んでいる。体力的にも精神的にもかなり疲れたみたいだ。

僕は帰りにアイスの自販機（ここの献血ルームは献血後アイス一個無料で買えるコインをくれる）で棒つきアイスをもって帰路につく。

「ちょっと、待って」

献血ルームを出たところで高橋さんに呼び止められた。

つつかつかと歩いてくる姿はさながらパリコレモデル。

そして耳元でこういった。

「気持ちよかったでしょ？」

さっきのことを思い出して顔が赤くなってるのが自分でもわかる。

僕はこくこくと頷くことしかできない。

「だったらまた来てあげてね。彼女はあなたが初めてだったんだから。それとこれ」ぱっと差し出されたのは夏目さんの名刺。

「これ、渡しておいてって頼まれたから。連絡してあげたら喜ぶと思うわよ。」名刺の裏側に直筆で電話番号とメールアドレスが走り書きされていた。マジか。

「それと」

さらに近づいてくる高橋さん、耳元にまで迫ってきて、

「今度、私にも吸われてみない？」

僕はなんだか力が抜けてその場にへたりこむ。

考えといてねーとひらひらと手を振りながら立ち去るクールビューティ。
必ずまた来ようと心に誓う僕であった。

あとがき

短編小説処女作です。小説の書き方も勉強してないので、これはちゃんと書けているのか、読者の方にどの程度理解いただけるのか不安ですが、自分なりに試行錯誤したつもりです。

設定やらなにやら本編で書けなかったことを細かく説明したいのはやまやまですが、蛇足なのでやめておきます。一応、野望としてはこの世界設定で何個か短編を書いて、一つにまとめるようなことができたらなあと思います。

また献血ルームの描写は体験を元にしてはいますが、体験を元にしたフィクションですのでご了承ください。2種類の献血についての説明はちゃんと説明すると長くなるので簡単にしましたが、厳密にいうとちょっと違うので、ご興味ある方は赤十字社のホームページ等をご参照ください。最初、献血を紹介するような小説が書けたらいいなと思い、書き始めましたが妄想が膨れ上がりふざけた内容になってしまいました（笑）でも筆者としては、こういうのも一つのラビズアクションかなと勝手に思ったりします。

最後になりますが、素人小説を最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。感謝の気持ちしかありません。もしも、今後もくだらない文章を読んでやってもいいよという奇特な方がいらっしゃったら、時間はかかると思いますが気長にお待ちいただけると幸いです。

献血ルームの夏目さん

<http://p.booklog.jp/book/70624>

著者 : cinnamonwan

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/cinnamonwan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70624>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70624>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ